

田中重光さん（日本被団協代表委員・長崎原爆被災者協議会会長）

6月7日(土)14時～神戸まちづくり会館大ホール

「第17回記念のつどい 被爆ピアノコンサート」(5/24)が終わり、タイミングよく田中重光さんの講演会があり、参加しましたので報告します。

母のこと、私の体験を伝えていこう

田中さんは4歳の時、長崎の爆心地から6km離れた親戚の家で外にいて被爆した。その時白い光があったことは鮮明に覚えている。家の中はめちゃくちゃになった。すぐ、裏山に逃げた。母親は学校に救護応援で行ったが、死臭がひどく、やけどの人々のうじ虫をとるのが大変だったとのこと。父も爆心地に応援に行ったので、「入爆」し、その後、病気がちとなったためか、母への暴力がひどく、母は一時家を出ていった。父は56歳で肝臓がんで亡くなった。妹が生んだ第1子は、肺が小さくて息ができず3日後に亡くなった。田中さんの体調は今は問題ないとのこと。

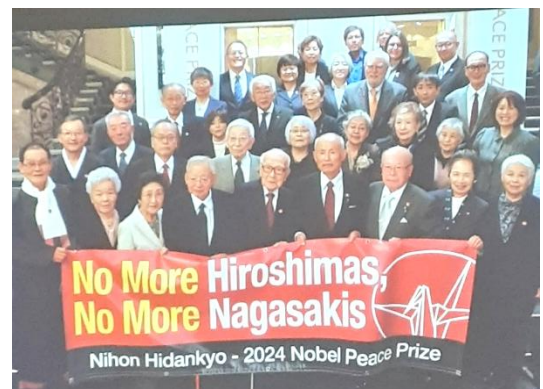
田中さんは、国鉄に就職し、機関車の運転手をした。国鉄民営化反対闘争では先頭になって活動した。再雇用で和歌山電車区に配転され、退職後は長崎に戻り、被団協の活動に関わった。2017年に会長になった。

ノーベル平和賞受賞報道の時は

日本被団協がノーベル平和賞の候補になったのは1985年からであり、その後は10年毎に有力候補となりながらも、他の団体・個人が受賞した。特に2021年のICANが受賞した時、日本被団協としては、「受賞は絶望的」という雰囲気になり、その後の会議では話題にもならなかった。ただ、広島では、一応、受賞の報告を聞く体制は取っていた。

田中重光さんは、受賞発表の10月11日は、日本被団協の会議が東京であり、ノーベル賞の話題はなく、長崎への飛行機の中にいた。顔を知っていた方から受賞のことを知らされ、テレビをつけた。長崎に到着したら報道陣がいっぱいだった。

代表委員の田中熙巳さんも自宅に帰ると報道陣がいっぱいで、何かと聞いたとのこと。このように、日本被団協として、ノーベル平和賞受賞は本当に驚きだった。



オスロでの授賞式

12月10日の授賞式には30名の代表团（韓国の被爆者団体、国連の中満さんや海外の平和活動家なども含む）で参加した。とにかく、代表3名はVIP対応で、すべてが驚きの連続だった。街中では若者が中心となった「たいまつデモ」が印象的だった。各地で、受賞報告会



田中熙美さん 田中重光さん 箕牧智之さん

に参加したが、真剣に我々の話を聞いてくれ、世界に「核兵器禁止の声が届いた」と実感した。

帰国する時、スカンジナビア航空の機長がエコノミーに座っていた我々に気づき、会社と連絡して、我々3名をビジネスクラスに変更してくれた。このことも印象的だった。

日本政府の対応

一方、日本政府の対応はこうしたノルウェー政府や世界の対応と全く違っていた。東京のノルウェー大使館は歓迎会をしてくれたが、オスロの日本大使館は何もしてくれなかった。帰国後、石破首相が「受賞報告をしてくれ」とのことで首相官邸に行ったが、核兵器禁止条約のことには一切触れず、コップ一杯の水が出ただけ！



日本政府のこの間の態度は、日本被団協のノーベル平和賞受賞が「迷惑」との態度だった。

スペイン、フランスへの訪問

受賞後初めて被団協の田中重光団長と原水爆禁止日本協議会（日本原水協）の代表団が海外遊説を行った。1/16-26の間、スペイン、フランスの国会、学校、大学、市庁舎等で講演を行い、「核なき世界」への連帯感を実感した。どこでもメディアが大きく取り上げてくれた。

日本原水協が1985年の国際平和ビューロー（IPB）での候補者選定会議で、「日本被団協」の名を提案し、それが採択されたことが今回受賞のきっかけとなった。



「被爆者の遺産を受け継いでいくのは、私たちすべての人間の責任」とのノルウェーでのスピーチを受け、「今後も若い世代に伝えたい」と締めくくられた。

私は、田中さんの話を聞いて、改めて、先日、成功させた「被爆ピアノコンサート」のテーマを「ひびけ世界へ 被爆ピアノコンサート」としたことの意義、また、地域で非核の運動を地道に作り上げることの必要性を痛感しました。なお、私の実家は小倉ですが、母親が「原爆が落ちなくてよかったね」とよく言っていたことで、長崎の人に「申し訳なか」との思いを引きずっていました。しかし、今回の田中さんの話と人柄に引き込まれ、何かホッとしたものを感じた講演会でした。